20230404
プリレーピンという特異な文学者の名前は、池田嘉郎氏や上田洋子氏のおかげで私も一応聞き知っていたが、具体的にどういう人物なのかは、なかなかつかめないままだった。最近、マルレーヌ・ラリュエルの 2019 年の論文を遅ればせに読んで、現代政治思想の中での位置づけがある程度分かってきた。Marlene Laryuelle, "Back From Utopia: How Donbas Fighters Reinvent Themselves in a Post-Novorossiya Russia," *Nationalities Papers*, vol. 47, no. 5, 2019.
このラリュエル論文は主題をプリレーピンだけに絞り込んでいるわけではなく、「ポスト・ノヴォロシア」という観点から、ドンバスの戦闘に従事した人たちのその後を追い、代表例としてギルキン（ストレルコフ）、ボロダイ、そしてプリレーピンの 3 人を挙げている。「ポスト・ノヴォロシア」とは見慣れない表現だが、2014 年の春から夏にかけて、ドンバスの 2 つの「人民共和国」の運動を隣接する諸州に広げるために掲げられた「ノヴォロシア」という旗が短期間に挫折して、撤回されたという事情を指す（4 月に「ノヴォロシア」という言葉を使ったプーチンは、その後この言葉を繰り返すことはしなかった）。この戦闘に義勇兵として駆けつけたロシア人だちは、ロシアに戻って市民生活への再統合を図るほかなくなった。それでも、当初の期待を完全には捨てきれない人たちは、それぞれの流儀で自己の主張を正当化しようとしたということが「ポスト・ノヴォロシア」の語で表わされている。ラリュエル論文で取り上げられている 3 人のうち、ギルキン（ストレルコフ）とボロダイは政治的・軍事的文脈で言及されることがあり（2022 年秋以降に言動を再活性化して、注目を集めている）、私も不十分ながらある程度のイメージを持てるようになってきた。これに対して、プリレーピンは文学の世界では知名度が高いようだが、現実政治の世界ではあまり言及されることがなく、私にとってはよく分からない人という印象があった。そうした中で、今回読んだラリュエル論文は手際よい概観と問題提起を含んでいて、教えられるところがあった。
ザハール・プリレーピン（1975 年生まれ）はもともと内務省特殊部隊で働き、1990 年代後半にチェチェンで戦闘に従事した後、文筆活動に転じた。ロマンチシズムやセンチメンタリズムと遠いドライな文体が特徴らしく、いくつかの文学賞（フランスの賞を含む）を受賞して名を挙げた。同じく文学者であるリモーノフの率いるナショナル・ボリシェヴィキ党に属したこともあり、「左」「右」の両面を併せ持つ、割り切りにくい人物らしい。ある時期までプーチンの激しい批判者だったが、クリミヤ併合後、熱烈な支持者に転じた。但し、クレムリンがドンバスの大義を十分支持していないという点については政権批判を続けている。その立場は基本的にロシア・ナショナリズムだが、ロシア・ナショナリズムにありがちな反ユダヤ主義には反対しており、デカブリストの自由主義を支持するなどといった複雑性を持つ。一つの特徴として、「ノヴォロシア」イデオロギーへのセンチメンタルな愛着をもってはおらず、より慎重で無難な「ドンバス」の語を選好している点がある。彼によれば、ドンバス現地の人々はロシアがウクライナ全体を征服することを望んではおらず、もっぱらドンバス 2 州（あるいはせいぜいハルキウとオデーサ）のことだけに関心を集中している。このようにプリレーピンの特徴を描いた上で、ラリュエルは文芸ジャンルとしての「ノヴォロシアもの」が多数の作品を生んでいることを紹介している。これは多数のサブジャンルに分かれ、「ノヴォロシア学」（歴史と郷土地誌）、政治評論、「あ

りえたかもしれないもう一つの現実」を描く空想小説、回想類、日記などにまたがるという。
論文の結論部では次のように述べられている。ドンバス戦争の初期には、多くの観察者が「ブーメラン効果」の可能性（ノヴォロシアの暴力的ユートピアがロシア国内の安定性を損ない、民族主義的な準軍事組織の活動が抑えられなくなる）を予期したが、これは実現しなかった。クレムリンはクリミヤ併合による国民結集を実現すると同時に、ドンバスが統御不可能になるのを防止することができた。そのことはロシア・ナショナリストを失望させた。ナショナリストが呼びかけたウクライナとの全面戦争およびキーウ征服の主張はロシアの世論によっても当局によっても支持されなかった。元の義勇兵たちは市民生活に再統合する中で革命の旗を振ることは許されなくなった。いまや「ノヴォロシア」の語は公式の場ではほとんど使われなくなっているが、それでも「ノヴォロシア」の語が使われうる唯一の空間が文学の領域である。プリレーピンの例は、ドンバス紛争がもはやロマンチックな体験でなくなっている状況でもノヴォロシアの神話が深く根付いているということを物語る。2014 年のクリミヤとドンバスの冒険は、それ自体は短期のものだったとしても、ロシアの政治的想像力に長期的な効果をもった。
この結論を今日の状況で読むと、相当大きい違和感が生じる。ウクライナとの全面戦争およびキーウ征服論はロシアの世論によっても当局によっても支持されなかったとあるが、2022 年にはまさしくその試みが再発したということをわれわれは知っているからである。しかし、そういう後知恵を括弧に入れて、この論文が元来書かれた 2018-19 年頃に立ち戻るなら、当時の状況はそういうものだったのかもしれない。だとするなら、その後にまたしても大きな変化が起きた（そして変化は続いている）ということになるのだろうか。

20230416
『民主主義教育 21』という雑誌の第 17 号（同時代社、2023 年 4 月）に、1 月 7 日に行なった講演の記録（「ウクライナ戦争――そのいくつかの背景」）が掲載された。当日の録音を編集部の責任で文章化したもので、やや話にまとまりがないが、とにかく私の考えの一部を示してはいる。
なお、ウクライナ戦争に関しては、今月上旬に和田春樹氏をはじめとする約 30 人が発起人となって新しい声明を発した。その是非をめぐっては、かなり激しい論争がある。私は発起人たちと批判者たちの双方に知り合いがおり、どちらに対しても「まんざら分からないでもないが、手放しで賛同もできない」というアンビヴァレントな気持ちに引き裂かれ、なかなかすっきりとした態度表明をすることができない。ここでは、どうしてそうなのかということについて記しておきたい。
論点を大別して、これまでの経緯と今後の展望に分けて考えるなら、私自身は前者の方に力点をおいて、いろいろと調べたり考えたりしてきた。そういう選択をしたのは、私はもともと現代史を主要課題とする歴史家であり、現状分析からかなりの期間遠ざかっていたという事情もあり、現状および将来の問題を追うよりも、直近の過去の経緯を確認する方が自分に似合っていると考えたからである。その作業は細々と進行中だが、ここ 1 年ほどあれこれと調べたり考えたりしているうちに、この問題に関して日本で発言している論者

たちの認識には、その立場に関わりなく、かなり大きな欠落があるのではないかという気がしてきた。だからといって、私に明確な結論があるわけではなく、ポツリポツリと手探りでの作業を継続している最中だが、とにかく日本における認識の欠落を可能な限り埋めることに多少なりと貢献したいと考えている（これまでもフェイスブックやホームページなどでいくつかの関連発言をしてきたし、今後も継続予定）。その作業にはそれなりの意義があるはずだとは思うが、過去の経緯が分かったからといって、それが直ちに未来へ向けての指針を示すわけではない。歴史と現状および未来の間には密接な関連性があるが、その関連性は絶対的な必然性ではなく、選択・飛躍・不確定性等々の要素をはらまないわけにはいかない。未来というものは本質的に不確定で、予測を超えたものである。
そうである以上、これまでの経緯に関する認識をいくら深めても、現在および未来に関わる有効な提言ができるというわけではない。そのことを断わった上で、敢えて直観的にいうなら、当面停戦も和平も実現しそうにないという暗い展望に傾く。もっとも、絶対にそうでしかありえないとまで断言することはできず、ひょっとしたらどこかに一縷の望みがあるのかもしれない。その「どこか」が具体的にどこであるかは、人によって考え方が異なるだろう。だとすれば、ひょっとしたら平和に役立つかもしれないと思われることは、ダメ元精神で何でもやってみたらよいのではないかという気がする。ある人はできるだけ早い停戦を願望し、それがさらには恒久的かつ公正な和平へのステップとなることを期待し、別の人はウクライナが戦い続ければロシア国内で民主化運動が高まってプーチン政権打倒と平和が実現するだろうと期待している（ここに挙げたのは簡略化した例示に過ぎず、それ以外にも種々の展望や期待が提示されている）。こうした期待はどれも、もし本当に実現するならば結構なことだが、実際にそうなる可能性がどれほどあるかと考えるなら、残念ながらその可能性は極度に低いというのが冷厳な現実であるように思える。それでも、可能性が低いということはゼロということはないので、低い可能性に期待を託して、その方向で働きかけを続けるのは悪いことではないだろう。その際、何が平和――それも公正な平和――に貢献するかは各人の主観的判断によるしかなく、ある人が有意義と考えることが他の人からは全く無意味だとか、むしろ有害無益だと判断されるということもありうる。そうである以上、この問題をめぐって論争が進行することは不可避であり、自然なこととともいえる。ただとにかく、具体的な展望が異なるにしても、事態に心を痛め、何とかして犠牲を最小限に食い止めることができないかと考えるという一点で共通しているのであれば、共通の願いのために意見を交わすという建設的な論争が可能なはずである。ところが、あたかも敵味方であるかのように分かれて、トゲトゲしい論争を交わしているケースがまま見られる。これは本当に悲しいことだ。

20230420
早いもので、この春で定年退職から 10 年の歳月が過ぎた。歳をとるにつれて時間の流れが速く感じられるようになるのは人の世のならいで、私もこの 10 年はあっという間に過ぎたという気がする。しかし、その間に起きた出来事を振り返ってみると、大きな波乱に満ちた変動の時代であり、中身がぎっしりと詰まった歳月でもあった。
まず 2014 年には、ウクライナ危機（「マイダン革命」、クリミヤ併合、ドンバス戦争開始）

があった。その頃、私は自分の心境としては「歴史としてのペレストロイカ」研究に専念するため現状分析からは手を引こうと考えていたのだが、現に大きな出来事が起きている以上、全く知らぬ存ぜぬというわけにもいかず、引き裂かれる思いをしながら中途半端な発言を何カ所かで行なう羽目になった。
その年の後半には、「グレーター東大塾　ロシアはどこへ行くのか」という企画に引っ張り出されて、副塾長たる池田嘉郎氏の依頼で塾長を務めることとなった。ロシアと関わりの深い企業人の方々と議論を交わすというのは、私のそれまでの人生でほとんどなかった経験で、戸惑いながら企画を実行に移し、2016 年にはその成果を、塩川伸明･池田嘉郎編『東大塾　社会人のための現代ロシア講義』（東京大学出版会）として刊行した。
2015 年には論文集『ナショナリズムの受け止め方――言語・エスニシティ・ネイション』（三元社、2015 年）が出たほか、旧著『民族とネイション』（岩波新書、2008 年）の韓国語版が出るという嬉しいニュースがあった。もっとも、韓国語の読めない私には、各国語ごとに微妙なニュアンスの違いのある一連のタームが韓国語ではどのように訳されているのかを確かめることができないというもどかしい思いが残った。
この時期には、橋本伸也氏を中心とする共同研究に参加して、「記憶の政治」という問題に取り組みだした。2015 年に関西学院大学で開かれた国際シンポジウムへの参加およびその成果としての橋本伸也編『紛争化させられる過去――アジアとヨーロッパにおける歴史の政治化』（岩波書店、2018 年）への寄稿が主な成果だが、それ以外の形でも重要課題として持続的に考え続けることになった。
同じ時期には、故･大沼保昭氏の主宰する大がかりな共同研究にも参加した。世界史全体の見直しに関わるような大風呂敷すぎる企図であり、主宰者の逝去（2018 年）のせいもあって、具体的な成果にはたどり着かなかったが、いろいろな意味で頭を刺激され、また多くの他分野の研究者との交流の機会ともなった。共同研究としては、その他に、飯田文雄氏を代表とする多文化主義の研究、沼野恭子氏を代表とする東スラヴの文化と歴史に関する研究、武藤祥・山崎望両氏を共同代表とする自由民主主義の裏面史に関する研究に加わった。
2017 年はロシア革命 100 周年だったため、その年から翌 18 年にかけて、種々の企画に関与し、文章を書いたり講演したりして、かなり慌ただしい日々を過ごした。この時期に書いたいくつかの文章を中心に論文集をまとめる作業（2019-20 年）の最中にコロナ禍が到来し、多くの人々同様、私もこれまでにない新しい体験をした。論文集『歴史のなかのロシア革命とソ連』（有志舎、2020 年）は、まさしく緊急事態宣言が出た直後に校正することになった。
上に書いてきたような仕事と並行して、歴史としてのペレストロイカ研究とりまとめの作業に一貫して取り組んできたが、懸案の著作『国家の解体――ペレストロイカとソ連の最期』（全 3 冊、東京大学出版会）は、2021 年 3 月に何とか刊行に漕ぎ着けた。その後、いくつかの場で合評会を開いてもらったり，いくつかの書評に接したりして、批判や感想との対話や応答に努めた。
長年取り組んできた大仕事に区切りがついたことで、しばらくは休養をとって、のんびりした日々を過ごせるのではないかと思っていた矢先に、2022 年 2 月にウクライナで戦争が始まり、とても休養どころではない慌ただしい日々が続くことになった。これは現在進

行中だが、現状分析から遠ざかっていた私としては、大慌てでにわか勉強をしながら、あれこれの文章を書いたり講演したりすることになった。感覚として、こんなに忙しい日々を過ごすのは現役時代以上だという気がした。
以上は主に研究生活のことを記したが、その間にプライヴェートな方面でも大小の出来事があった。若い頃は、年金生活者というのは波乱の少ない単調な生活を送っているのだろうと想像していたが、とてもそれどころではない。誰かが「初めての還暦」という言葉を使っているのを見て、うまいことをいうなと感じたが、還暦であれ、古希であれ、初めての経験であり、以前には想像できなかった新しい経験をしたり、試練にさらされたりすることになった。
こういう慌ただしい「貧乏暇なし」状況は、現在も基本的に変わらず続いている。ただ、歳とともに体力が衰え、ちょっと頭や体を使うだけで疲れやすくなっているため、仕事のペースはどんどん遅くなっている。そのこと自体は不可避だとしても、老化に伴う鈍磨をなるべく小さめのものにとどめながら歩み続けていきたいと念じている。

20230422
当初の予定よりも大幅に遅れたが、和田春樹編『（山川セレクション）ロシア史』（上下、山川出版、2023 年）がようやく出た。
この「山川セレクション」シリーズは、体裁のみ新しくて、実質的にはかつての「各国史」の再版という性格のものだが、最新の時期を扱った部分のみは例外で、旧版後の新しい情勢を付け加えるという方針をとっている。そのため、旧版で最新の時期を担当した私は、第 12 章第 4 節「21 世紀のロシア」および補章「周辺諸国の動向」を新たに書き下ろさねばならなかった（いつだったか池田嘉郎氏が「現在史」という言葉を使っていたが、私にとってこの仕事はまさしく「現在史」だったという感触がある）。起伏に富んだこの時期――しかもウクライナ戦争の直接的前史をなす――の概説を大急ぎで書かなくてはならないというのは非常に大きな負担で、七転八倒させられた。常日頃締め切り厳守というプリンシプルを遵守している私としては例外的なことだが、戦争勃発という緊急事態を理由に、異例の締め切り延長をお願いし、その遅れを最小限にとどめるため、他の仕事をほとんどすべて放擲して、必死になって書き進める日々が続いた。その際、私自身の視野が十分及んでいない事項について触れる必要があったため、多くの方々に助けを仰ぐことになった。書物の性格上、謝辞を付けることはできなかったが、油本真理、上垣彰、大串敦、雲和広、地田徹朗、富樫耕介、前田弘毅、松嵜英也、吉村貴之の各氏から種々の有益な助言をいただいたので、ここに記して謝意を表したい。もちろん、あり得べき欠陥は私の責任である。
なお、編者の序文には、開戦の 1 年後までをカバーしたと書かれているが、それは本文執筆の実態を反映していない。本文は昨年 4-6 月に書き、校正時に大急ぎで付け加えた簡単な追記は同年 10 月だから、開戦の 1 年後までではなく「本文は開戦から 4 ヶ月後まで、校正時の短い追記はその 4 ヵ月後まで」が正しい（コメント欄につけた追記参照）。
全員をタグづけ。
（追記）。本文に書いたように、この「山川セレクション」シリーズは基本的に旧版の単純な新装版であり、最新の情勢に関する補遺を例外として、それ以前の章については誤記

・誤植の訂正にとどめるものと私は了解していた。ところが、どういうわけか、私が悪戦苦闘して最新の情勢について書いた原稿を提出してから数ヶ月後に、前の方の章の執筆者が新稿を提出したらしく、その結果、刊行が当初の予定よりも大幅に遅れることになった。私が担当した部分には、「2022 年 6 月時点で状況はこうなっている」と書いた個所があちこちにあり、入稿後あまり時日をおかずに出るはずだったのだが、大幅に遅れた結果、時宜に適さない内容になってしまった。辛うじて「校正時の追記」を 10 月に書き加え、現状との乖離を最小限にとどめるべく務めた。これでもって 2022 年末くらいまでには出るだろうと思っていたら、その後、またしても不可解な事情で何度も刊行が遅れて、追記自体が時代遅れという間の抜けたものになってしまった。

20230509

半年以上前に出た本だが、ヴァシレ・エルヌ『ぼくはソ連生まれ』（群像社、2022 年）という本を読んだ。ソ連時代のモルドヴァで生まれ、育った著者がルーマニアで刊行した著作である。訳者あとがきによれば、ルーマニア国内でベストセラーになったばかりか、ロシア、ブルガリア、スペイン、イタリア、ハンガリー、グルジア、ポーランドでも翻訳出版されたという。そのように広い範囲で反響を呼ぶ反面、共産主義時代の負の側面を軽視してソ連時代へのノスタルジーに浸っているとする非難や批判もかなりあったようだ。著者は決して旧体制を賛美したり、価値的に肯定しているわけではなく、その欠点や矛盾を意識した上で、それでもそういう世の中で人々が生きていたことを忘れることなく、その感覚を書き留めておこうという狙いで本書を書いたようだが、それが賛否両様の反響を呼ぶのも主題の関係上自然なことなのかもしれない。

共産主義時代を価値的に肯定したり否定したりするよりも、その中で生きるとは具体的にどういうことなのかを実感を込めて描き出す本書の発想は、アレクセイ・ユルチャク『最後のソ連世代――ブレジネフからペレストロイカまで』（みすず書房、2017 年）とも相通じるところがある。ユルチャク著は後期社会主義の実相を多面的に描いて、多くの人々の注目を引きつけてきた。

エルヌ著は観点としてはユルチャクに近いが、書物の性格はかなり異なっている。ユルチャク著は人類学という分野の研究書で、相当分厚く、気軽に読める本ではないのに対し、本書は軽いタッチで個人的な思い出を綴ったエッセイ集であり、わりと薄い本でもあるので、ずっと気軽に読める。また、時代的対象として、ユルチャクはブレジネフ時代に重点をおき、ペレストロイカおよびその後についてはあっさりと触れるにとどめているのに対し、本書はペレストロイカやソ連解体後の資本主義化過程にもかなり触れていて、より現代的という違いがある。そういう差異を念頭において両著を読むと味わいが増すかもしれない。

余談になるが、一部で話題となっている斉東鉄腸『千葉からほとんど出ない引きこもりの俺が、一度も海外に行ったことがないままルーマニア語の小説家になった話』という本（左右社、2023 年）の巻末に添えられた「ルーマニアックの本棚」の中で本書も取り上げられているという。相互に全く縁のないままに書かれた 2 つの本が思わぬところで遭遇したということのようだ（このエピソードは『群像社通信』第 134 号で知った）。

20230514
先月から、自転車に乗る人にヘルメットの着用が義務づけられた。これは自転車に乗る人の安全を守る上で重要な意味を持つといった解説がなされている。私自身、日頃自転車に乗ることが多いので、これは切実な問題である。しかし、ヘルメット着用が本当に安全に役立つかというと、個人的には疑問を覚える。実は、私はここ十年ほどの間に２度も自転車で転倒したことがある。その都度、かなり大きな怪我をしたが、どちらも足や手の怪我であり、頭をどこかにぶつけたわけではない。実際に転倒した２回のほか、横を暴走する自動車にヒヤリという思いをいだかされたことは何回もあるが、その場合も、もしぶつけられて転んだら足や手に大きな怪我をするだろうなという怖さであって、頭をどこかにぶつけるかもしれないと感じたことはない。それに、万が一頭をぶつけるような事故だったら、全身の大打撲とか内臓破裂になって、ちゃちなヘルメットではものの役に立たないのではないかという気がする。自転車の安全をいうのであれば、自転車専用レーンなどをもっと整備して、自動車運転者の善意だけを当てにするほかないという状況を何とかしてほしいというのが率直な感想なのだが、これは私だけのことだろうか。

20230601
3 週間ほど前、コロナ・ワクチンの 6 回目接種を受けた（モデルナ 2 価式）。ワクチンを何度も打つことの有効性とか、副反応とのバランスなどをめぐってはいろいろな議論があるようだが、私の場合、副反応がごく軽いのと、重症化した場合のリスクが比較的高い部類に属することから、重症化予防効果が消えないうちの再接種はある程度安心感を高めてくれる。
コロナの全般的動向としては、新しい変異型が出てきたようだし、感染者数も一時の減少から増大に転じて、「第 9 波」と呼ぶべき局面に入ったようだ。もっとも、半年ほど前から全数把握が事実上放棄されて、掌握度が落ちたようだし、この 8 日からはいわゆる５類移行によって定点観測のみとなったので、詳しい実態はますます分からなくなった。伝え聞くところでは、新しい変異型の感染力はこれまでよりも強く、従って統計的に掌握されている以上の感染増があるらしいが、毒性の強さについてはまだ確たる知見が蓄積されていないようだ。5 類移行に伴い死者の報告と登録にかかる時間も長くなったため、「第 9 波」による死者の規模は大分時間が経ってからでないと分からないのだろう。それにしても、万が一死者が爆発的に急増するような事態となれば、何らかの兆候が現われるだろうから、そうした兆候に関するニュースがないなら、とにかく急増とまではいかないと考えていいのだろうか。世間では、「コロナはもう終わった」という雰囲気が広がっている（WHO の緊急事態終了宣言はコロナ禍自体の全面収束を意味するわけではなく、今後も警戒が必要だという留保を伴っていたが、そうした留保には気をとめない人の方が多いようだ）。私ももし本当にそうなら嬉しいが、「第 9 波」に伴う死者数の統計が遅ればせに発表される時期が来るまでは完全に安心しきるわけにはいかないという気もする。
マスクをつける人もめっきり減ってきた。そういう中で今でもマスクをつけている人はい

くつかの類型に分かれるだろう。①これといった理由なしに、惰性だったり、人目を気にしたりしてつけ続けている、②花粉症その他の理由で、必要があってつけている、③重症化したときのリスクが高いため、コロナを特に強く警戒する必要がある。厄介なのは、個々の人がこのうちのどれに該当するかが分からないことである。もし①であるなら、そういう人は軽蔑してもよいのかもしれない。②であるなら同情してもよいが、しょせんは他人事だと考えることもできる。しかし、③の場合には事情が異なる。ひょっとして自分が無症状の感染者かもしれず、自分がその人に感染させたら申し訳ないことになる。である以上、そういう人に近づくときにはこちらもマスクをつけるべきだということになるだろう。しかし、①②③の区別をつけることができないということは、そのどれが適切かを判断することもできないということを意味する。悩ましいが、①②に該当する人について誤認をしても実害はないのに対し、③に該当する人について誤認をしたら、その人に実害をもたらす可能性がある。そう考えるなら、相手が①②③のどれかは分からないにしても、とりあえず③に該当するかもしれないと考えて、それにふさわしい対応をとるのがエチケットということになるのではないだろうか。

20230609

いわゆる「カラー革命」について。

やや古い話だが、21 世紀初頭以降、「カラー革命」と呼ばれる一連の政治変動がいくつかの旧ソ連諸国で起きたということがよく言われる。2000 年サカルトヴェロ／グルジア／ジョージア「バラ革命」、2004 年ウクライナ「オレンジ革命」、2005 年キルギス／クルグズスタン「チューリップ革命」がその具体例とされる。その他、旧ユーゴスラヴィアのセルビアで 2000 年に起きた「ブルドーザー革命」を含める説もあり、後の「アラブの春」（2010-11 年チュニジアの「ジャスミン革命」など）をこの延長上で捉える説もある。

これらの政治変動の性格については、「権威主義的なロシアの影響から離れて、欧米に接近して民主化を目指した市民運動」という多数説と、「民主化という口実のもと、それらの国を欧米の影響下におこうとした謀略」という少数説が対峙している。そのような評価の分かれはあるが、一連の諸国で性格をほぼ同じくする変動が相次いで生じたということと、それらはどれもロシアの影響から離れる政変だったという点では多くの論者が一致している。しかし、個々の事例について考えてみると、実はそれらは非常に大きく異なった現象であり、そもそも一つの名称のもとに一括できるものなのかどうか怪しいのではないかという疑問が湧く。「民主化」か否かという政治論争はさておくとして、親ロシアから反ロシア＝親西欧への転換という特徴づけも疑わしい。私はこれら諸国の現代史についてそれほど通じているわけではないが、ともかくある程度の関心を持ってきた。たまたま、比較的最近、『（山川セレクション）ロシア史』下巻（山川出版社、2023 年）の補章「周辺諸国の動向」を担当し、サカルトヴェロ、クルグズスタン、ウクライナについても一通り概観したが、その際に痛感したのは、それら諸国の政治史はそれぞれに大きく異なった個性を持っており、類似した現象が相次いで起きたとは考えにくいということだった。

2000 年サカルトヴェロ／グルジア／ジョージアの場合、大統領選挙ではなく議会選挙がきっかけであり、「不正」を疑われる公式発表があるよりも前に野党からの抗議運動が高

まって開票作業が途中で停止された。野党はシェワルナゼ大統領の辞任を要求し、騒然たる情勢の中でロシアのイワノフ外相が調停のために来訪し、その説得をうけてシェワルナゼは辞任を決断した。もともとシェワルナゼは政権初期にはある程度対ロシア関係を改善したとはいえ、次第にロシアと距離を置くようになり、将来におけるＮＡＴＯ加盟の可能性を示唆したり、アメリカとの関係改善に努めていたから「親露政権」だったとはいえない。この政変後に政権についたサーカシヴィリはアメリカ帰りで、アメリカ流のネオリベラリズム政策を実行したり、対外的にもアメリカと歩調と合わせてイラク派兵を大幅増員したりしたが、そうした政策には国内でも批判が強く、その後のサカルトヴェロ政治は複雑な曲折を重ねている。

2004 年ウクライナ「オレンジ革命」は通常「カラー革命」の典型例と見なされているが、このときの政治的対抗は「親露か親西欧か」がすべてだったわけではなく、権力エリート内の分裂と新興ブルジョアジー間の政争が大きな要素をなしていた。対立する両陣営は最終段階では憲法改正で妥協的合意に至ったし、ロシアもその合意に関与していたから、「革命」で断絶が生じたとは言い難い面がある。「オレンジ革命」の勝者となったユシチェンコは、最初の外遊先にロシアを選んだことに示されるように、必ずしも明確な「反露・親西欧派」として出発したわけではない。その彼が「反露・親西欧」色を鮮明にするようになったのは、「オレンジ革命」を推進していた勢力内での分裂と議会における少数与党化、経済不振、政治腐敗などといった要因で政権支持率が大幅に低下した政権後半期のことである。

キルギス／クルグズスタンの場合、初代大統領アカーエフは、中央アジアで唯一共産党第一書記ではなかったという経歴に示されるように、「民主的で改革派的な政権」ということをセールスポイントとしており、対外的には全方位路線をとって特定国との密着を避けていたが、長期政権化の中で次第に権威主義化が指摘されるようになっていた。2005 年２-３月の議会選挙（大統領選挙ではなくて）のときに反政府運動が高まり、それが暴動化する中でアカーエフは国外逃亡した。これが「チューリップ革命」と呼ばれた政変だが、この国ではその後、何度も類似の暴力的政変が繰り返された。その背景には、政治エリートの凝集性が低く、諸勢力の間で安定した均衡が生じにくい状況がある。

ついでに、旧ソ連の外だが、2000 年のセルビアの場合について簡単に見ておくなら、このときに現職大統領ミロシェヴィチを破って政権についたコシュトゥニツァはナショナリストであり、親露的な立場で知られていたから、この政変は親西欧路線の勝利ではなかった。

なお、必ずしも「親露か反露＝親西欧か」が政治対抗の主要軸でないということはモルドヴァについても当てはまり、この国の政治をそういう軸でばかり考えると実態を見誤る。

このように見てくると、「カラー革命」と総称される一つながりの出来事があったという議論はほとんど成り立つ余地がないように思われる。各国の政治史的展開はそれぞれに個性的であって、共通性があまりないし、「民主化」か否かという論争点はさておくとしても「親露政権から反露＝親西欧政権へ」という括り方はできそうにない。それでいながら、多くの人たちが「カラー革命」があったという認識を前提として、それを賛美したり呪ったりする言論を繰り広げているというのも、また事実である。とすると、これはリアルな実態に関わる政治史上のテーマというよりも、むしろ言説やナラティヴに関わる象徴の政

治ともいうべき領域のテーマとして考えた方がよいのかもしれない。

20230624

「プリゴージンの乱」は一体何を意味するのか、今後どうなるのか、気のもめることだが、信憑性の測りがたい各種情報が乱れ飛んでいる現時点では、何も言うことはできない。そこで、思い切って関係のない話題。

博士論文を改稿して単行本として刊行することの意味をめぐって、少し前にＳＮＳ上で種々の意見が飛び交っていた。私は最近の状況にはよく通じておらず、この議論に直接加わるつもりはないが、やや離れた地点からの感想を述べてみたい。私の若かった頃の日本では、大学院在学中（あるいは退学後まもない時期）に博士論文を書くという慣行はなく、一部の分野を除き、博士論文というものは功成り名遂げた大学者＝老大家が書くものだというイメージが一般的だった。私も博士論文は書かなかったが、それに近いものとして、社会科学研究所の助手論文というものを書いた。これは長大すぎて一冊の本に収まらない分量だったが、数冊の本に分けて単行本化した。これが若き日の私の学界デビュー作ということになるが、後になって振り返ると、いろんな意味で成熟度の低いものだということを痛感するようになった。もっとも、そこに私なりの模索の跡が反映しているのは確かであり、未熟な若書きではあっても、ある種の愛着もなくはない。そういうわけで、アンビヴァレントな思いをいだかせる作品ではあるが、とにかく何の留保もなしに「これが私の代表作です」として広く宣伝する気にはなれない。それから数十年の勉強を経て、自分なりにある程度納得のいくものを書けたという気がしてきたのは大分後のことである。そのため、「主要業績」を数点挙げよと言われるときには、最初の作品ではなく、その大分後の著作を挙げるようにしている。

私自身の例はあまり一般性がないので、これ以上グタグタ書くことはしないが、若い人たちの作品を読んでいて、異なった前提条件のもとではあるが、ある程度似た感想をいだくことがある。今の若手（あるいは少し前まで若手だった中堅）研究者は、博士課程進学後限られた年限内に博士論文を書くことが要請されているのに加えて、それだけでは就職の条件として足りず、なるべく早く博士論文を単行本化することが迫られているようだ。それはやむを得ないことなのだろうが、博士論文もその単行本版も熟成度が足りないと感じさせられることがままある。それでも、その後に努力を重ね続けた人は、何年か経った後の作品で、目を見はらされるような成長の跡を見せることがある。もっとも、今の大学は種々の事情で研究に割ける時間が少なくなっているため、大きくまとまった本を書くことはなかなかできず、学会報告とか単発論文などの形で切り売りせざるを得ないことが多いようだが、そうした切り売りの単発作品であっても、「この人は意外に伸びてきたな」と感じることがある。初期の作品を読んだときにその後の成長を予感できなかったのは私の感度が低かったということなのかもしれないが、とにかくそういう人たちについて、いつまでも学界デビュー作が「代表作」と見なされているのは不幸なことではないかという気がしてならない。熟成度の低いデビュー作よりも、大分成熟度の上がった作品を――たとえ、それが大きくまとまった形をとってはいないとしても――評価する方が、本人のためにも学界のためにもよいのではないだろうか。